

外科通論

佐藤進講義
門人筆記

十九

佐藤進講義
門人筆記

外科通論

明治十二年五月
廿二日版權免許

佐藤尚中藏版

外科通論卷之十九

佐藤進講義

門入筆記

第二十編

贅腫論

第四十四章

命○贅腫ノ義解○一般ノ解剖的論説○贅

腫發生ノ源○一定ノ組織系内ニ細胞發

生ノ定限○胎生學トノ關涉○發育ノ性

狀○贅腫中ニ生スル變質機ノ解剖上檢

#1305202299
v.19

查○贅腫ノ外形

夫レ腫脹ト贅腫トハ自ラ別アリ人最初ニ此理ヲ詳カニセサル可ラス抑モ以上論說中腫脹ト命名セシ者ハ血管ノ内外ニ別ナク血液非常ニ集積シ若クハ血水或ハ細胞組織中ニ浸淫シ形成滲的以テ一局部ニ腫起ヲ生スル者ヲ名稱スルナリ是レ即チ炎機ニ因テ生スル症狀ナリ然而ノ此編論スル所ノ者ハ全ク之ニ反ス病床實際上ニ於テ之ヲ論スルトキハ贅腫ナル者ハ炎性新生物トハ其發生ノ原因ヲ異ニス而シテ其發

育モ大ニ異ナリ炎性新生物ノ如ク一定シタル
結果ナク極マリナキ諸般ノ結果ヲ成スモノト
ス其他贅腫ハ之ヲ構成スル組織ハ炎性新生物
ニ比スレハ精密ニシテ高等ノ位地ヲ占ムル者
ナリ又之ヲ詳カニ檢スルトキハ以上論載セシ
炎機ニ由テ生スル炎性新生物ハ發生ノ性狀ノ
ミナラス其經過中諸般ノ變態ヲ為シ而シテ類
敗乾固化膿等ニ由テ其發生ヲ障礙セラル又炎
性新生物ニ一種固有ナルハ其新生物每常變シ
テ結組織即チ瘢痕組織トナリテ其全局ヲ結ス

ナリ是レ其結果贅腫ニ異ナル所ナリ蓋シ炎機
ヲ皮膚粘膜等ノ表面ニ生シ其表面ノ表皮胞及
ヒ内皮胞剥脱スルトキハ復ヒ同物ヲ發生シテ
之ヲ補ヒ又骨ニ炎ヲ生シテ其部ニ癰痕ヲ生ス
ルトキハ其癰痕遂ニ化シテ骨質トナリ又神經
ニ炎ヲ生シテ其部ニ癰痕ヲ生スルトキハ其癰
痕中ニ神經纖維ヲ生スルヲ以テ知ルヘシ但シ
此ノ如キ作用ヲ營ムニ主タルモノハ其部ニ新
生スル血管ナリトス既ニ論スルカ如ク炎機ハ
都テ急慢二性ト組織ノ内外トニ關ハラヌ一定

ノ結果ヲ具フルモノニシテ癥痕ニ由テ其全局
ヲ終ハルモノト知ルヘシ時トシテ結組織神經
骨等ノ癥痕ヨリ即チ結組織贅腫、神經贅腫、骨贅
腫等ヲ生スルヲアリト雖此ノ如キハ贅腫中最
モ稀有ノモノノミナラス例外ニシテ異常ノモ
ノトナスヘシ

夫レ體中何ノ部ヲ撰ハス其一部ニ非常ノ増大
ヲ見ハストキハ其増大ナルモノハ同元質^{エレメント}ノ其
容積^{容量}ヲ非常ニ增長セシモノ^{單性}ナルカ將タ其
部ニ曾テ現存スル元質ノ中間ニ更ニ元質ヲ新

生セシモノナルカヲ辨別セサル可カラス若シ

新生セシ物質本部ノ織質

即チ母基

ト同質ナルトキ

ハ之ヲ同質性肥大ト云ヒ

ホノプラスチセビヘルトモヒ

又之ニ反シテ本部ノ

織質ト同質ナラサルモノハ之ヲ異質性肥大ト

ヘテノプラスチセビヘルトモヒ

云フス同質性新生物ヲ生スル状態ニ二種アリ

一ツハ原質

ユレノント細胞

ノ單ニ分割シテ其數ヲ増スモ

ノ例之一箇ノ軟骨細胞分割シテ二箇トナリ又

二箇ノ細胞復ヒ分割シテ四箇ノ細胞トナルカ

如ク漸々其數ヲ増殖スルヲ云此ノ如キ状態ニ

由テ肥大ヲ為スモノヲ過多成形性新生物ト名

ヒレハプラスチセ

ツケ又之ニ反シテ原質細胞セルヨリ新ニ圓形ノ不定
 細胞セル成スヘキハ最初末々其性質ヲ決定シ組織ヲ形
 サル者ヲ云フ以テ孕出シト云ヒ孕出セラルハ
 下之ニ徴メシテ不定細胞ヨリ遂ニ本部ノ組織
 胞ト云フ而シテ不定細胞ヨリ遂ニ本部ノ組織
 ト同シキ組織ヲ形成スルヲ同質性新生物ト名
 ツク而シテ右ニ論説セル異質性新生物ハ每常
 最初ニ不定細胞ヲ發生シ贅腫ノ肉芽時期ト稱
 ス此細胞ヨリ本部組織ニ全ク異ナル組織ヲ形
 成スルナリ例之畢丸ニ軟骨ヲ生シ腦中ニ表皮
 ヲ生スルヲアルカ如シ

右件論スル同質新生物異質新生物ヲ區別セシ
 ハ「ヒルシヨ」氏ヨリ勦マレリ專テ解剖上ヨリ
 之ヲ論スルトキハ甚ク適當ニシテ且ツ理ヲ得
 タルモノ、如シ然レハ異質新生物ノ義解ハ次
 ニ論スルカ如ク之ヲ用ユルニ限局アリ一物ヲ
 シテ其始メヨリ之ニ異質新生物ノ名ヲ命スヘ
 カラサルヲアリ之レ一物質ニ變化アリテ其質
 ヲ始終變セサル者ニアラサレハナリ又同質新
 テ惡性ノモノトシテ異質新生物ヲ以テ良性ノモ
 ノトナスカ如キハ其當ヲ得タルモノト做ス可
 カラサル
 總テ贅腫ヲ構造スル原質ハ未ク疑團

ヲ免カレスト雖蓋シ血管ヨリ脱出セシ白血球
ナラン

單肥大

ヒール・バル・フラレー

過多トハ時トシテ之ヲ區別スル

困難ナリト雖理論上ヨリスルトキハ區別シ得

ルヲ難キニ

アラス又成熟セシ同組織原

細胞ヲ云

ヨリ成ル新生物モ亦之ヲ區別スルヲ難キニア

ラサルヘシ又結組織中ニ於テ結組織ヨリ構成

セラル、贅腫ヲ生スルトキハ之ヲ同質新生物

ト云ヒ又之ニ反シテ骨腦及肝臟中ニ之ヲ生ス

ルトキハ之ヲ異質新生物ト云ハサルヲ得サル

カ如キハ最モ著シク區別シ易キモノナリ其他
成熟セシ蜂窩狀癌組織ノ如キハ之ヲ種別スル
固ヨリ困難ナルモノニアラス如何トナレハ此
ノ如キ組織ハ體中何レノ部ニ於テモ之ヲ見ル
ヲナキカ故ナリ即チ何ノ部ニ之ヲ生スルトモ
之ヲ異質性新生物ト看做スヘシ右ニ述フルカ
如キハ同質新生物ト異質新生物トヲ區別スル
ニ最モ容易ナルモノナリ然レモ此ニ一ノ新生
物アリテ其初メ未タ成熟セシ通常ノ組織ノ性
狀ヲ見ハサス又タ全ク異常ノ組織タルヲ見ハ

サ、ルトキハ此原質即チ不
定細胞ヨリ何様ノ組織ヲ

構造スルカヲ辨識スルヲ能ハサル時期ニ於テ

ハ固ヨリ此新生物ハ成熟シテ一定ノ性狀ヲ有

スル組織ニアラサルヲ以テ之ヲ同質新生物ニ

歸シテ可ナランカ甚タ決定シ難シトス右ニ論

述スル同質及異質新生物ノ論意ヲ以テスレハ

炎性新生物モ此ノ如キモノハ總テ何レノ部ニ

於テモ其初メ異質新生物ニ歸セサルヲ得サル

カ如ク然リ而シテ此炎性新生物遂ニ化シテ結

組織癰痕トナルトキハ在来ノ結組織中ニアリ

テハ同質ナルヲ以テ同質性新生物ト云ハサル
ヲ得ス之ニ反シテ筋及ヒ腦骨新生物ハ骨セニ
アリテハ之ヲ異質新生物ト云ハサルヲ得サル
ハ論ヲ俟タサルナリ

總テ不定細胞ヨリ發生ノ基本ヲ資ル各種ノ贅
腫ハ最初ヨリ成熟シテ一ノ組織ヲ形成スルノ
間自ラ發生ノ時期ヲ追テ其形態ヲ改メサル可
カラス夫レ不定細胞ハ部局ヲ撰ハス一所ニ集
積スルトキハ之ヲ異質体ト為ス又一ノ新生物
悉ク不定細胞ヨリ成ルトキハ即チ之ヲ異質物

ト稱スルナリ然レモ此ノ如キ不定細胞變シテ
紡績狀細胞トナルトキハ之ヲ何レニ歸ス可キ
カヲ疑フヘシト雖一部ニ集積スルトキハ之ヲ
ヘトロブラシ異質性成形トナスヘシ然リ而シテ紡績狀細胞
ハ常ニ胎兒ノ結組織筋及神經中ニ發見スルモ
ノナリ若シ筋ニ之ヲ集積スルトキハ是ヨリ何
様ノ物質ヲ形成スルモ之ヲ同質物ト為サハル
ヲ得可カラサル如シ右ニ論說スル所ヲ以テ之
ヲ考レハ同質物異質物ノ名稱ハ必竟之ヲ發生
スル部局及其多少或ハ發生ノ時期ニ從テ自ラ

其名稱ヲ改メサルヲ得サルヲアルヲ以テ時ア

リテ人自ラ其名稱ヲ恣ニスルヲ得ヘシ

各原質

即細胞増大

ノ機能ハ之ヲ實驗シ得難

シト雖各原質ノ増數

成形過多

ハ之ヲ實驗シ得ヘク

且ツ組織ノ生理的發育モ絶ヘス此機ニ由ルモ

ノナルカ故ニ此ニハ只不定成形細胞ノ發原及

ヒ其發育機ニ就テ論セントス夫レ往時ハ諸般

ノ贅腫ノ發生原ヲシテ之ヲ結組織胞ノ増數ニ

歸シテ疑ハサリキ輒近ニ至リテ斯ノ贅腫ノ原

質タル不定細胞ハ結組織胞ノミテアラヌ却テ

其過半ハ血管ヨリ脱出セシ白血球ナルヲ確
證セリ不定細胞ヲシテ卷ク之ヲ白血球ト
為スハ蓋シ僻論タルヲ免カレス往時
人ノ誤マツテ結組織胞ヲシテ贅腫ノ原ニ歸セ
シハ多クハ不定細胞ノ簇々群集セシ位置及ヒ
其變質等ニ着目セシニ因スルナリ例之ガルコ
トムヲ顯微鏡ニ照シテ之ヲ檢スルトキハ即チ
二箇若クハ數箇ノ核ヲ具フル不定細胞羣ヲ成
シテ簇々相集ルヲ見ル而シテ結組織胞具ヘシ
結組織纖維ノ間ニ最初ハ不定細胞ノ小簇ヲ成
セシモ漸々大簇トナルヲ見シヨリ細胞ノ羣簇

ハ結組織胞ヨリ産出セシモノトナセリ而シテ
 不定細胞ヨリ多挾ヲ有スル大ナル細胞所ヨリ
 ーゼン胞即最ナルモノナリト臆斷セサルヲ
 得サルカ如シ軌述組織中ノ細胞滲滯ハ血管ヨ
 リ脱出セシ白血球ナルヲ知ルト雖未タ贅腫中
 ノ不定成形細胞ノ原ヲ詳明ニシ全ク疑團ヲ免
 カレシムルヲ能ハサルヘシ且ツ新生内皮胞ノ
 發生ノ如キモ同シク漠然トシテ其真證ヲ得ル
 ヲ難シトス然レトモ漸々其數ヲ增多スル作用
 ハ一胞分離シテ二胞トナリ二胞更ニ四胞トナ

ルカ如ク分離ノ作用ニ基ツクハ疑團ナシトス
ヘシ

上件論セシ不定成形細胞トハ體中何レノ部ヲ
撰ハス一組織ノ刺戟ヲ受ケテ其部ニ生スル圓
形ノ細胞ヲ稱名スルナリ即チ炎症性新生物ノ條
下ニ之ヲ詳論スルカ如シ輒近ニ至ルマテ人此
ノ不定新生細胞ヲシテ卵ヨリ漸々諸般ノ組織
ヲ成形スルカ如ク之ヨリ亦各種ノ組織ヲ成形
スル者ナリト想像セリ故ニ結組織胞ハ只諸種
ノ結締質

結組織軟骨硬
骨等ヲ總稱ス

血管神經ヲ構成スルノ

ミナラス是ヨリ内皮ニ属スル諸組織及ヒ諸腺等ヲ構成スル者トナセリ然ルニ輓近「チール」氏ノ内皮癌ノ新説一タヒ世ニ出テシヨリ爾來往時ノ面目ヲ一新セリ是贅腫學ノ一變革ト云モ過言ニアラサルヘシ同氏ノ學説ニ據レハ胎生學ニ由テ人ノ明知スル如ク胎兒體ハ其始メ三種ノ各葉ヨリ成ル之ヲ種葉ト云フ即チ角葉、中葉、腺葉是ナリ而シテ此三葉ハ各一定ノ組織ヲ成形スルヲ主トリテ互ニ其本分ノ區域ヲ侵スヲ得サルモノトス即チ角葉ヨリ生スルモノ

ハ神經表皮、皮腺、生殖腺、耳ノ迷路、水晶體等ナリ
中葉ヨリ生スルモノハ結締質、筋、血管系、水脈腺、
脾、末梢神經等ナリ腺葉ヨリ生スルモノハ腸管
ノ内皮、肺内皮及ヒ肝脾腎等ノ分泌原質分泌ヲ分
ビテルトル原質ニレテ、エヲ云ナランナリ此ノ如ク胎兒體ノ三葉
ヨリ構成セラル、理ヲ發見セシハ實ニレマツ
ク「ライヘルト」「キリーケル」「ヒス」「ワルテール」等ノ
諸氏ノ偉勲ニシテ歐洲ニ於テハ右諸氏ヲ胎生
學ノ鼻祖トナス右ニ論スルカ如ク胎兒體ハ三
種ノ各葉ヨリ成リ而シテ各一定ノ組織ヲ構成

スルヲ主トル者ナルカ故ニ生育の間於テ
 甲葉ヨリ生スル者ヲシテ乙葉ヨリ之ヲ生スル
 ヲ能ハス乙葉ヨリ生スルモノ 甲葉ニ之ヲ生ス
 ルヲ能ハス故ニ内皮ヨリ產生スル所ノ細胞ハ
 結組織ヲ構成スルヲ能ハス又結組織ヨリ内皮
 及ヒ腺ヲ構成スルヲ能ハス是ヲ以テ綴令一組
 織ヲ成スルニ由テ其部ニ細胞ヲ新生スルモ
 此新生物ハ別種ノ組織ヲ形成セスシテ一系ノ
 區域内ニ在スル組織ヲ生スルモノトス即チ互
 ニ其區域ヲ侵シテ混同スヘカラサルヲ法トス

右ニ論スル所ヲ以テ之ヲ考フレハ夫ノ不定細胞ナルモノハ真ノ不定細胞ニアラスレテ最初ヨリ自ラ一定レタル從來ノ母胞ヨリ産出セラレ同系相繼テ連綿蕃殖レ且ツ一定ノ區域内ニ在ル組織ヲ成形スル細胞ニ外ナラス是ヲ以テ之ヲ見レハ遺傳即チ一系蕃殖ハ生活アル萬物ノ嚴法ト云ヘシ右ニ論スルカ如ク輓近ノ論說ヲ以テ之ヲ見レハ真ノ異質物ナル者一モ之ナクシテ一定ノ種葉ヨリ此ニ屬スル諸般ノ組織ヲ産出スルノミ故ニ甲ノ種葉ヨリ乙ノ種葉ニ

属スル組織ノ構成スルヲ能ハサルモノトス又
 贅腫發生ニ當リテ其中ニ見ハル所ノ細胞ニ就
 テハ或ハ之ヲ結組織細胞ヨリ產生セラル、者
 トシ或ハ血管ヨリ脱出スル白血球ナリトスル
 者アリ絶ヘス其論說ニ變遷アルヘシト雖輒近
 ハ其細胞ヲレテ之ヲ血管ヨリ脱出スル白血球
 トナス然レ氏悉ク之ヲ白血球ナリトシ結組織
 胞ヲレテ毫モ之ニ預ルヲナシトスルハ僻論タ
 ルヲ免カレス是ヲ以テ之ヲ觀レハ贅腫中ニ發
 見スル細胞ハ不動結組織胞モ亦其一部ヲナス

モノニシテ大半ハ白血球ナリトナスヘシ然リ
而シテ此脱出スル白血球ナルモノハ何レノ部
ヨリ血中ニ来タルモノナルカ未タ詳カナラス
ト雖恐ラクハ水脈腺及ヒ脾臓ノ原質細胞ナラン
即チ中葉ニ属スル原質トナスヘシ
贅腫ノ發育及ヒ生活ハ甚タ諸般ナルモノナリ
夫レ贅腫ノ増大發育スルヤ二様ノ別アリ一ハ
其初疾患ヲ蒙ムリレ組織ノ一部即チ第一結節ヨリ漸
次ニ周圍ニ向ツテ發生スル者ナリ即チ贅腫ノ
中央ニ集積スル細胞漸々其數ヲ増シ次第ニ周

圍ニ向ツテ發育ス其周圍ノ組織新ニ疾ニ罹リ
増大スルニアラス往時ハ贅腫ノ中ニ血管ノ擴
張スルヲ見テ贅腫ヲ炎性新生物ノ兆候トセリ
然レ氏精密ノ檢査ニ據テ之ヲ見ルニ最初贅腫
ヲ生セントシ組織ノ一部ニ結節ヲ造ルニ當リ
テ血管擴張シ且ツ新生スルハ炎ニ由テ生スル
モノト全ク異ナリトス然レ氏最初結節ヲ造ル
ニ當リテ炎症ニ於ルカ如ク細血管及ヒ靜脈壁
ニ平常ノ機能ヲ失シ斯ク擴張スルモノナルカ
否未タ知ルヘカラス一ハ右ニ論スルモノ、如

ク贅腫其中央ヨリ發育セシテ之ニ隣接スル
周圍ノ組織更ニ疾ニ罹リ患部次第ニ増大スル
モノナリ此作用ニ由テ贅腫ヲ生スルトキハ之
ニ近接スル組織ノ細胞ハ贅腫ノ壓迫ニ由テ互
ニ壓排セラレ自然疾患ヲ蒙ムルノミナラス其
部ノ組織及ヒ細胞ハ贅腫ノ浸淫且ツ荒蕪ヲ受
ケ遂ニ贅腫トナルモノナリ第一種ノモノハ其
發育ノ原ヲ中央ノミニ取り即チ固有ノ細胞ヨ
リ増大ス而シテ患部ハ限局シテ他部ヲ侵ス勢
少ナレ故ニ中央ヨリ發育スルモノハ之ヲ周圍

ヨリ發育スル贅腫ニ比スレハ患部ノ為メニハ
良幸ナリトスヘシ第二種ノモノハ即チ周圍ヨ
リ發育増大スルモノニシテ絶ヘス贅腫ニ近接
スル周圍ノ組織ヲ浸淫且ツ荒蕪シテ蔓延スル
コ之ヲ炎性新生物ニ於テ見ルカ如シ而シテ患
部ノ組織ニ最モ不良ナルハ右二種ノ病性ヲ合
併シタルモノトナスヘシ

贅腫ノ生活ヲ論スルトキハ其變化甚々諸般ナ
ルモノナリ常ニ變動ヲ止マサルコト之ヲ炎機
ニ於テ觀ルカ如シ然リ而シテ贅腫ハ諸般ノ源

因ニ由テ急性若クハ慢性炎ヲ起シ即チ疼痛腫張血管擴張等ハ症ヲ生ス而シテ炎性ノ給養障礙ニ由テ贅腫ノ組織中ニ細胞ヲ浸淫シ加之遂ニ膿性浸淫ニ變スルモノナリ總テ贅腫中細胞ヲ發生スルヲ過多ニシテ且ツ蔓延スルヲ甚クク贅腫ノ發育ニ比スレハ血管ヲ發生スル慢徐ナル者ニアリテハ生活機ヲ保ツヲ少ナシトス故ニ僅些ノ障礙モ能ク贅腫ノ各部ニ於テ其發育機ヲ發止セシメ或ハ頽敗ニ陷ラサラシムルニ足ルモノナリ贅腫ノ變化中最モ著シキモノ

ヲ變質トナスヘシ夫レ變質ハ之ヲ生スル急性
ナルアリ慢性ナルアリ又贅腫中急性炎ヲ生ス
ルハ稀ナリ然レハ衝突打撲之カ源トナルヲア
リ此外傷性炎症ノ轉期ハ血管ヲ新生シ或ハ結
組織ニ富メル贅腫ニアリテハ瘢痕性萎縮ヲ遺
コシ或ハ此症ヲ見ハサスレテ分解シ消スルモ
ノアリ然レハ多クハ血液溢出壊死及ヒ化膿ヲ
續發スルモノトス慢性炎ハ贅腫ニ生スルノ最
モ多シトス而レテ著ク炎症性新生物ヲ產出シ
或ハ新生血管ニ富ミタル海綿樣潰瘍或ハ遲鈍

性潰瘍ヲ生スルヲアリ又時トシテ組織ノ乾酪
變質及ヒ脂肪變質或ハ粘膠樣ノ溶解物ヲ發見
スルヲ必ナカラス此ノ如キ軟化部ノ周圍ニ血
管ノ「トロンボ」セ或ハ側壓性血管擴張ヲ生ス
ルヲ之ヲ炎部ノ膿腫或ハ乾酪變質部ニ於テ見
ルカ如シ右ニ述ルカ如ク諸般解剖的變化ヲ見
ハスヲ以テ每常各贅腫ニ固有ナル組織ノ本性
ヲ正シク鑑識シ得ルヲ能ハサルヲアリ其他贅
腫ノ經過中諸般ノ解剖上變化ヲ見ハスヲアリ
例之久シク發生シ来リシ結組織腫頓カニ細胞

ヲ産出集積シ且ツ著シク血管ヲ新生シテ其質
柔軟トナルヲアリ或ハ之ニ反シテ軟性ノ贅腫
漸次細胞ヲ消亡シ而シテ贅腫ノ結組織中ニ瘢
痕性收縮ヲ生シ其質變シテ硬固トナルコトア
リ

贅腫ニ生スル變化ハ右ニ述フルカ如クナルヲ
以テ各種ノ贅腫ニ就テ其解剖上ノ關係ヲ明カ
ニシ以テ贅腫ノ性状ヲ鑑明スルニハ多クノ學
識ト經驗ヲ要セサル可カラス或ハ時トシテ贅
腫ノ構造單ナラサルトキハ鑑識シテ適當ノ名

ヲ命スルヲ難キコアリ然レモ總テ諸種ノ組織ヨリ構成セララル、贅腫ノ名稱ハ通常贅腫ヲ構成スル諸多ノ組織中最モ其量ノ居多ナル組織ニ由リ稱名ヲ下スヘシ

贅腫ノ外見ヲ論スルトキ多クハ圓形ノ結節様物ニシテ按診及ヒ視診ニ由テ容易ニ其周圍ノ組織ヨリ分界シ得ヘキモノナリ然レモ結核或ハ皮膚ノ^{パベル}蕁疹及ヒ^{プステル}含膿疹等其他皮膚及ヒ粘膜ニ生スル慢性炎性新生物モ亦乳突起ニ生シテ發育シ其形結節狀ヲ成スモノナルカ故ニ只

形狀ヲ以テ解剖的ニ贅腫ヲ鑑識スルヲ難シトス

贅腫ノ形狀及ヒ其質ノ硬軟及色等ニ從ツテ命稱ヲ下セシモノ少ナカラス固ヨリ古名ニシテ適切ナラスト雖令尚之ヲ襲用スルモノ多シ即チ贅腫ノ莖^{アリ}長短ヲ具ヘテ延長スルモノハ之ヲホリ^ーベ^ーント名ク例之鼻ホリ^ーペン子宮ホリ^ート云カ如シ然レ氏組織學上ニ其性質ヲ精シク檢スルトキハ纖維性^{ナル}コマ^ニ性^ハ或ハ^三キソマ^ニ腫^液性贅腫ナルヲアリ故ニ此^ハ如キハ

元來之ヲ構成スル組織ニ從ツテ名ヲ附セサル
ヲ得サルヲ明カナリ又贅腫ノ潰瘍ニ陷キリテ
其面著シク凸隆シ其形菌ノ如キモノアリ人之
ヲ名ケテ海綿腫ト名ク然レトモ海綿腫ノ名ハ
元來其質柔軟ニシテ海綿ノ如キ組織ヲ稱名ス
ルモノナリ又血管或ハ血液ニ富メル者ハ之ヲ
血腫或ハ細血管擴張腫或ハ海綿腫ト云フ又贅
腫堅韌ト云フ或ハ硬骨ノ如ナルモノハ之ヲ硬
ト云フ又贅腫ノ色及ヒ其性質腦質ニ類ス
其構造サルコーム、癌及ヒ水脈腺腫ニ似ルモノ

ノ髓様腫ト云總テ其性髓質ニ類スルモノハ最
モ惡性ノモノニ屬ス即チ髓様「サルコーム」或ハ
神經瘤ノ名アルカ如シ又褐色帶青黑色帶褐黑
色或ハ純黑色ヲ帶ヒタル贅腫アリ之ヲ黑色腫^{メラノーマ}
ト名ツクル等ノ如シ此色素ハ蓋シ溢血ヨリ生
シ或ハ細胞固有ノ機能ニ由テ生スルモノナラ
シ

○第四十五章

○贅腫ノ病因○ミヤスマト贅腫ノ開涉
○特異性傳染○知覺亢進セル組織ノ特
異反應○内部ノ刺戟○刺戟機ノ性情○
經過及豫後○惡液質○療法○贅腫ノ種
別

贅腫ノ病因ハ未タ之ヲ詳ニシ難シ而レテ炎性
新生物ヲ發スル原因ト區別スルヲ能ハサルヲ
アリハニ炎性新生物ト贅腫ヲ比較レテ其原因
ノ同異ヲ論スヘシ抑諸多人急性炎機發病メカニ

外科通論

川

慢性炎機

問歇熱及膿血病等

ハ體外ヨリ竄入スル瘡

ハ又瘡毒ニ由テ生スル者ナリ然レハ急性瘡

慢性瘡腫ナル者ハ蓋之ナレ只慢性風土病性瘡

慢性瘡腫トナスヘキ者ハ「グロフ」

甲狀腺腫

ニ於テノ

之ヲ見ベシ是炎症產物ニアラス如何トナレ

ハ「グロフ」ハ炎症產物ノ如ク自然ニ復ヒ縮小

シ或ハ化膿シ或ハ「グロフ」ニ由テ萎縮スルモノ

アラサレハナリ其源因一種ナリ者ニシテ外

ヨリ竄入スルモノナリ壯年ノモノハ「グロフ」

スル土地ニ來タルモ感受スル「グロフ」ニ年

齒ノ者モ必ス該病ニ感スルト云ニアラス蓋シ
感シ易キ遺傳性素質アルニ似タリ而シテ外ヨ
リ其毒ヲ傳フルヤ恐ラクハ血液之カ媒妁ヲナ
スモノナラン固ヨリ甲狀腺ハ其部ニ於テ何様
ノ作用ヲ以テ「ミヤスマ」ヲ感受スルヤ詳カナラ
ス是ヲ以テ「クロツ」^ポハ原ト瘴毒ヲ體外ヨリ血
中ニ取り而シテ全身ノ給養機或ハ分泌機ヲ妨
ケ以テ局部ニ如此キ疾患ヲ發動スルモノト做
スヘシ其他慢性瘴毒性傳染ニ由テ生スル贅腫
ヲ^{レオンチアレス}獅子面癩及^{エレハチアレス}結節癩トナスヘシ該病ハ体中何

部ヲ撰ハス皮膚ニ大ナル結節狀ノ纖維腫ヲ生
スルモノナリ然レ氏之ヲ贅腫ニアラストシテ
炎性産物ニ歸セントスル駁論ナキニアラサル
ヘシ

局所性傳染即チ固定性傳染毒ノ傳播ハ能ク諸
般ノ炎機ヲ起發セシム之ニ由テ贅腫ヲ發生セ
シムルヤ否未タ疑團ナキ能ハスト雖總テ腐敗
セシ物質ハ只炎機ヲ發動セシムルヲミナシテ
贅腫ヲ生セサルモノトス即腐敗物ノ傳染ニ由
テ生スル所謂屍結核ナルモノハ贅腫ニ屬セス

如何トナレハ自然ニ消滅シ且ツ再發スル性ヲ
有セサレハナリ又腐膿ノ種接ハ能ク局所ニ炎
症ヲ起發セシメ炎症ノ性狀ハ膿ノ性
質ニ由テ一様ナラス又全身病
ヲ生シ而シテ之ヲ各局部ニ復ヒ發動セシム例
之梅毒ノ如シ若シ贅腫中含ム所ノ汁液若クハ
其細成分ヲ取テ之ヲ種接スルトキハ之ニ由テ
右ノ如ク復ヒ他ニ贅腫ヲ發スヘキカ否ヤハ方
今ノ論題ニシテ未タ確定セズ如此キ試験ヲ人
体ニ試ムルハ固ヨリ困難ナリ然レモ人体ヨリ
之ヲ獸ニ傳ヘ又獸ヨリ之ヲ獸ニ傳フルノ試験

ハ敢テ困難ナルモノニアラス如此キ試験ハド
ウトレポント氏^{（註）}メテ之ヲ施コセリ即チ犬ニ
生セシ癌汁ヲ他犬ニ種接セシメタリシカ功ヲ
奏セサリキ然レ氏贅腫ノ液汁若クハ其成分ヲ
獸ヨリ人ニ種接シ若クハ一人ノ液汁ヲ他人ニ
種接セシメハ効ヲ奏スヘキ歟否未タ知ル可カ
ラス人獸ヲ撰ハス總テ炎症產物即チ膿ヲ種接
スルニ由テ贅腫ヲ發生セシム可カラス又贅腫
ノ汁液若クハ其成分ヲ種接スルニ由テ炎症ヲ
發スル能ハス是各自ラ特異ノ性ヲ具フルニ由

ルナリ是ヲ以テ之ヲ觀レハ炎症產物ト贅腫ト
ハ自ラ特異ノ性質ヲ具フルナルヘシ又更ニ之
ヲ明證セシニ他條下ニ於テ之ヲ論セシ如ク一
局所ノ蔓延性炎症ハ之ヲ他所ニ及ホシ即チ第
二炎症ヲ發生シ而シテ其餘焔ヲ近傍ノ水脉腺ニ
傳ヘ之ニ由テ水脉腺ニ腫張ヲ生スルモノナリ
是レ蓋シ炎症部ノ細胞近傍ノ水脉腺ニ達シ其細
胞ハ一種起炎症ノ性質ヲ具フルヲ以テ水脉腺ニ
炎症ヲ起發セシムルナラシ炎症產物ハ時アリ
テ如此症狀ヲ發スレトモ炎症產物ノ局所性傳

深ヨリ贅腫ヲ生セシムルヲ絶ヘテヲキモノト
 ス然リ而メ水脈腺腫張ハ第一炎即チ原發炎症
 消却スルトキハ從テ消散スルモノナリ如此キ
 傳播ノ性狀ハ贅腫ニ於テモ亦之ヲ見ルヲ得
 ヘミ殊ニ細胞ニ富メル贅腫ニ於テス即チ最初
 ニ贅腫ヲ發生スル隣接部ニ於テ新タニ無數ノ
 贅性新生物ヲ生シ加之水脈腺ヲ侵シ腫張ヲ生
 セシムルヲ少ナカラス是第一贅腫ヨリ同質ナ
 ル第二贅腫ヲ生セシモノナリ故ニ第一贅腫ヲ
 除去スルトキハ第二贅腫ハ從テ消散ス又右ニ

反シテ遠隔スル他ノ局部ニ同質ノ贅腫ヲ生ス
ルコアリ之ヲ轉移性贅腫ト云是亦炎症傳染ノ
經過ト一樣ナリ然レモ贅腫ハ各特異ノ性質ヲ
具フル者ナレハ炎症產物ノ傳染ニ由テ轉移性
贅腫ヲ生スルコ能ハス又贅腫ノ傳染ニ由テ内
臟ノ轉移性膿腫ヲ生スルコナキモノトス總テ
贅腫ハ必ス傳染スヘキ性質ヲ具フルニアラス
傳染スヘカラサルモノ之アリ但シ傳染ス可キ
者ハ總テ之ヲ惡性ノ者トシ傳染セサル者ハ之
ヲ良性ノ者トナスヘシ然レモ如何ノ理ニ基キ

テ斯ノ兩性ノ區別ヲ生スヘキカ其源同ハ之ノ
 確言シ難シ然レモ一ハ之ヲ細胞特異ノ性質ニ
 歸スヘク一ハ細胞ノ運動シ易キト否ラサルト
 ニ由リ一ハ下等植物ノ種子ノ如ク土地ヲ撰ハ
 ス其發生ニ適應セル土壤ニ於テ蕃殖スルカ如
 ク体中諸般ノ組織中ニ同贅腫ヲ發生ジ易キ性
 質ヲ具フルニ由ル者ナラン其他贅腫細胞ノ水
 脉或ハ血管中ニ吸収セラル、多少及ヒ難易ニ
 由ルモノナラン故ニ柔軟ニシテ細胞ニ富メル
 惡性ノ贅腫醜様ナルノ如キモ堅靱ナル纖維性

ノ囊衣ヲ以テ包圍セラル、トキハ其餘勢ヲ水
 脈腺ニ傳フルヲナシトス囊衣ヲ具フル大ナル
 膿腫モ亦是ト一樣ナリ而シテ轉移性膿腫ナル
 モノハ既ニ論セルカ如ク其原因ヲ「エンボリー」
 ニ資ルモノナリ夫レ轉移性贅腫ヲ發スル状況
 ハ第一贅腫ノ細胞ヲ傳フルニ由テ第二水脈腺
 腫ヲ生スルト一樣ナリ蔓延性轉移性贅腫ハ最
モ稀ナリ只僅カニ腹膜
 胸膜ニ生スル癌或ハ「サル」
 コームニ於テ之ヲ見ルノミ輒迄ノ發明ニ由レハ
 病性新生細胞按スルニ病性
ノ者ニ限ラスハ自ラ獨立ノ生活
 ヲ存スル者ナルヲ疑フ容レス故ニ右ニ述フル

病性作用モ悉ク之ニ由ラサルヲ得ス斯ク細胞
ノ獨立ノ生活ヲ具フルハ輓近更ニ表皮粘液
層細胞ニ由テ證明スルヲ得タリ即チ佛醫
ウエルヂン氏千八百六十五年表皮ノ細片ヲ肉
芽面ニ種接セシニ其表皮片肉芽面ニ附著シ其
所ヨリ次第ニ表皮ヲ新生セリ進云余既ニ治シ
難キ潰瘍面ニ此
術ヲ施シ奏効ヲ見シハ
東京醫事新誌ニ詳論セリ
是ヲ以テ之ヲ見レハ一局所ニ生スル新生物ノ
細胞一旦剝離シテ血管若クハ水脈管ニ入り他
ノ局部ニ流達シ其部ニ同質ノ新生物ヲ更ニ發

生スルヲ蓋シナキニアラス又炎性新生物ノ如ク一ツノ贅腫迄部ノ水脈及血管ヲ壓迫スルトキハ既ニ論説セル如ク壓窄性「トロンボーセ」ヲ細血管或ハ水脈ニ生ス而シテ「トロンボーセ」中ニ贅腫ノ細胞ヲ竄入セシメ且ツ贅腫軟化シテ其中ニ生シ易キ「トロンボーセ」ノ細片ヲ血行中ニ取ルトキハ固ヨリ体中各所ノ細血管若クハ水脈ニ澁滯シ其所ニ同質ノ贅腫ヲ新ニ發生ス殊ニ如此病性作用ハ靜脈或ハ同時ニ肺動脈枝ニ發見スルヲアリ總テ轉移性贅腫ハ轉移性膿

腫ノ如ク殊ニ肺臟或ハ肝臟ニ發見スルヲ多キ
ニ似タリ但シ乳ノ贅腫如シノ之ニ密接スル胸
膜ニ及ホシテ胸膜贅腫ヲ生シ又腸或ハ胃ノ贅
腫ヲ之ニ密接スル肝臟ニ及ホシテ同器ニ贅腫
ヲ發生スルカ如キハ即チ病毒ヲ傳フル直達ニ
シテ其轉移モ亦大ニ容易ナルヲ以テ右ニ述フ
ル介達ノ者ト同シク論ス可カラス總テ急性ノ
炎症產物ハ一種起炎ノ性ヲ具フルモノナリ之
ニ反シテ慢性ノ炎症產物ハ贅腫ノ產物ノ如ク
起炎ノ性ヲ具フルヲ少ナシ然レモ慢性炎症產

物或ハ贅腫ノ產物類歟ニ陷リ遂ニ血行ニ達ス
ルトキハ熱ヲ起發セシメ且ツ血液混和不良及
全身ノ給養障礙ヲ將來スルモノナリ
器械的及化學的刺戟ヲシテ贅腫ノ原因トナス
ノ說ニ就テハ學者ノ所見一樣ナラス夫レ器械
的及化學的ノ刺戟諸般ナルヘシト雖未タ如此
刺戟ニ由テ隨意ニ贅腫ヲ發生セシメシ試驗ア
ルヲ聞カス右ノ刺戟ニ由テ每常生スル炎症ハ
一定ノ經過ヲ具ヘ且ツ永ク其刺戟ニ堪ユル者
ニアラス總テ何様ノ法方ヲ以テスルモ器械的

及化學的ノ刺戟ハ必ス只炎症ヲ起發セシムル
ノミニシテ贅腫ヲ發生セス然レハ体外ニ一種
特異ノ刺戟アリテ体中ノ組織此刺戟ニ遇フト
キハ必ラス贅腫ヲ發生セシムル者アルヤ否未
タ人ノ知ラサル所ナリ只衝突打撲傷創ヲ一部
ニ蒙ムリシ後其部ニ贅腫ヲ生スルナキニア
ラス然レハ如此キ外傷後贅腫ヲ生スルハ實ニ
稀ニ見ル所ノ症ニシテ固ヨリ證トナスニ足ラ
サルナリ且其刺戟ナルモノハ贅腫ノ誘因ニシ
テ其源因ニアラサルヘシ總テ外傷性急性炎症

ハ頬田ノ刺戟ニ由テ生スル慢性炎ハ一定ノ經
過ニ由テ治スルヲ常トス又恒ニ荷ヲ擔フ者背
ノ棘狀突起部ニ皮膚ノ肥厚ヲ生シ而シテ其下
ニ粘液囊ヲ生シ或ハ皮膚ニ潰瘍ヲ生スルカ如
キハ是レ刺戟ニ由テ起ル慢性炎ノ產物ニシテ
通常ノ症トナスヘシ其原因ヲ去ルトキハ諸症
從テ消散スルモノナリ然レモ同刺戟ニ由テ背
部ニ脂肪腫ヲ生シ漸次増大スルモノアリ如此
症ニアリテハ其刺戟ニ特異ノ原因ヲ求ム可ク
ラス刺戟ヲ蒙アリタル部局ニ贅腫ヲ發生スヘ

キ素因ヲ求ノサル可カラス是ヲ以テ贅腫ヲ發
 生スルニハ其組織ニ刺戟ニ應スル一種特異ノ
 性質ヲ具フル反應機アルモノト做スヘシ「ウイ
 ルシヨウ及「オ、ウエーベル氏ハ總テ最初贅腫ヲ
 生スルニハ外来ノ局所性刺戟イラダキ之ニ預ル「大ナ
 リトス故ニ体中何ノ部ヲ撰ハス最初贅腫ヲ生
 スル部ハ殊ニ外来ノ刺戟ヲ蒙ムル「多キ部ニ
 於テスルヲ以テ之ヲ證明ス故ニ統計表ニ據テ
 之「見レハ体中贅腫ヲ生スル「最モ多キ部ノ
 胃トナス次ニ子宮腔部次ニ顔及唇次ニ乳腺直

腸等トナスヘシ「^{ワイル}シヨウ氏」ノ説ニ據レハ
何様ノ刺戟ニ由テ或部ニ於テハ贅腫ヲ發生シ
或部ニアリテハ同様ノ刺戟ヲ蒙ムルモ贅腫ノ
發生セスシテ只單易ノ炎症ヲ發スルカヲ悉ク
明示スルヲ能ハスト雖一二ノ部局ニ就テ之カ
原因ヲ僅ニ説明スヘキモノアリ夫レ同刺戟ニ
由テ此所ニハ單易ノ炎ヲ生シ彼所ニ於テハ贅
腫ヲ生スルノ理解ハ蓋シ一部ノ組織曾テ調節^{レギュレーション}
機^{メカニスム}ノ障礙ヲ受ケ之ニ由テ常ニ組織ノ構成上ニ
障害ヲ生スルモノ更ニ一ノ刺戟ヲ其部ニ受ク

ルトキハ則チ其刺戟之カ誘因トナリ贅腫ヲ生
スルナラン故ニ「ウイルシヨウ」氏ハ解剖的構成
ノ障碍ヨリ或部ニ一種贅腫ヲ發生シ易キ素因
ヲ具フルモノヲ高老ノ年齒トナス或ル贅腫ノ
如キハ老人ノ一定局部ニ於テ之ヲ見ルヲ多キ
ヲ以テ證明スヘシ例之唇癌ノ如シ今之ヲ詳言
セニ「チエルシ」氏ノ説ニ據レハ總テ老男子ノ唇
ニ於テハ結組織著シク消亡シ之ニ反シテ内皮
ヲ主トシテ構成スル諸器例之脂腺汗腺粘液腺
毛囊等ノ給養却テ亢進シ且ツ發育盛

即チ調節
機ヲ妨ク

ナルカ故ニ唇ニ頻回ノ刺戟ヲ蒙ムルトキハ益
内皮胞ノ發生ヲ催進ス是唇癌ノ老男子ニ多キ
所以ナリト其他「ウイルショウ」氏ハ曾テ炎症ニ罹
リ之ニ由テ生機衰弱ヲ遺ヤシ部及ビ瘢痕ヲ結
ヒシ部ニハ贅腫ヲ發生シ易シトス然レトモ甚
タ稀有ノモノトスヘシ其他人身体中成熟ノ最
モ遲キ器械ニ贅腫ヲ發シ易シトス故ニ「ウイル
ショウ」氏ハ關節骨端、乳腺、子宮、卵巢、睪丸ヲ然リ
トナス右ニ論スル所ヲ以テ之ヲ見レハ贅腫ノ
發生ハ其病因ヲ未確定スヘカラスト雖局所ノ

外科通論

川崎氏

素因ヲ以テ贅腫發生ノ主源トナスニ似タリ然
レ氏贅腫ノ發生ハ慢性炎ヨリ炎性新生物或ハ
化膿或ハ乾酪變質等ヲ繼發シ易キ一種ノ素因
ヲ具フル體質アルカ如ク贅腫ニ於テモ之ヲ生
シ易キ一種特異ノ素因ヲ全身ニ存スル者トナ
シ以テ其病因ヲ説明シ得ヘシ其他贅腫ハ遺傳
アリ即チ慢性炎ニ罹リ易
キ遺傳ノ素質アルカ如シ其他贅腫ヲ生スルニ
内部ノ刺戟ニ由ル者アリト云説アリリンンドフラ
イ^ル氏ハ如此内部ノ刺戟ヲシテ生理上ノ諸物
新陳代謝ノ變調ヨリ化學上一種不明ノ刺戟物

ヲ一局部ニ生スルニ因スルモノトス然レ氏如
此ク只一局部ニノミ其源因ヲ求ムルヨリ寧ロ
遺傳若クハ後天ニ受ケレ體質中如此キ一種刺
戟性ノ物質ヲ具ヘ以テ各部ノ組織ヲ刺戟シテ
贅腫ヲ生セシムル者トナスノ穩説ニ及ハサル
可シ

右ニ述ルカ如ク贅腫ノ病因ヲ説ニ諸般ノ論説
アリト雖必竟臆説ニシテ信ヲ置クニ足ルヘキ
者少ナシ其他諸般ノ論説アリト雖實地ニ益ナ
ケレハ贅セス

豫後及經過贅腫ハ之ヲ截除スル后再發セサル
者アリ或ハ截除後其結痕中若クハ其周圍ヨリ
再發スル者アリ加之近傍ノ水脉腺ヲ侵レ之ヨ
リ内臓ニ蔓延スル者アリ甲種ノ者即チ再發セ
サル者ハ昔ヨリ之ヲ良性贅腫ト名ケ而シテ乙
種ノ者ハ之ヲ惡性贅腫即チ癌ト名ツク固ヨリ精
密ノ區別ニアラス如此單易ニ贅物ノ性質ヲ檢
知レ其善惡兩性ヲ鑑識レ得ヘキモノニアラス
精密ナル病床實驗及解剖的檢査ニ據テ之ヲ考
フルニ兩性ヲ區別スルヲ大ニ難ク或ハ全ク區

別ニ能ハサルヲアリ
其他贅腫ヲ生スルニ單生及多生ノ別アリ甲種
ハ通常体中ニ一箇獨生スル者ヲ云此種ニ屬ス
ルハ成形生熟セシ組織ヨリ形成セラル例之纖
維腫軟骨腫骨腫等ノ如シ乙種ハ同時ニ一定シ
タル組織ニ數多ノ贅腫ヲ撒生スルヲ云例之骨
ニ數多ノ軟骨腫^{コンドロ}皮下蜂窩^マ組織ニ數多ノ脂肪腫皮
膚ニ數多ノ纖維腫ヲ生スルカ如シ
傳染性贅腫トハ之ニ隣接スル組織ト密著且ツ
之ヲ浸淫シ絶ヘス其部ニ同質物ヲ新生シテ次

第二増大スルノミナラス加フルニ近傍ノ水脈
腺ヲ浸淫シ且ツ遂ニハ近傍ノ内臓ヲ侵スモノ
ナリ但シ其浸淫スル性状一樣ナラス或ル贅腫
ニアリテハ其傳染ノ性状正シク近隣ノ水脈腺
ニ至リテ止ムアリ唇癌顔癌等又或腫物ニアリテハ
近隣ノ水脈腺ヨリ遠隔ミタル部殊ニ内臓ニ傳
染スルヲアリ乳癌又水脈腺ニ傳染セスレテ全身
ニ傳染スルヲアリ即チ轉移性贅腫ナリ其他傳
染ノ遲速ハ大ニ諸般ナルモノトス又傳染性贅
腫ハ男女ヲ撰ハス總テ高齢ノ人ニ生スルヲ多

レ而レテ殊ニ一定ノ器械ニ生シ易シ又幼稚ノ
年紀ニハ却テ傳染性贅腫殊ニ惡性サルコマヲ
生スル素質ヲ具フルモノナリ然リ而レテ少壯
ノ年紀ニハ總テ贅腫ヲ生スルコト少シ殊ニ傳
染性贅腫ヲ然リトス生活法及給養ノ善惡貧富
人ノ性質人種開化ノ深淺等ハ贅腫ノ發生上ニ
關係ヲ及ホスコトナキカ如シ而シテ輒近贅腫ノ
解剖的構造ストレクツールハ人ノ競フテ研究スル學科ニ屬ス
而シテ諸多學者ノ検査ニ據レハ都テ惡性腫ニ
屬スル諸種ノ贅腫ハ視檢上マクロスコープ及ヒ顯微鏡検査ニ

於テモ一定ノ性質ヲ具フル者ナルヲ徴セリ
 然レモ之ニ由テ每常豫後ヲ確定スルヲ得サ
 ルモノトス但通常惡性腫ノ本性トナスヘキモ
 ノハ細胞ニ富ミ且ツ動モスレハ潰瘍ヲ發生シ
 易キモノトス而シテ惡性贅腫ノ傳播作用ハ恐
 クハ其腫ニ具フル一種細胞ノ運動ニ由テ起ル
 モノナラニ故ニ之ヲ吸收ニ易キ部ニ於テハ殊
 ニ傳播ヲ促進スルモノナリ是血管及水脈ノ贅
 腫中若クハ其近接部ニ密佈スルトキハ其毒ヲ
 吸收ニ易キ以テナリ又如此血管及水脈ノ口ヲ

開クト否ヲサルトニ關シテ吸收ニ難易アルヘ

シ

傳染性贅腫ハ其初ノ單生スルヲ常トス一時ニ

多生スルモノニアラストス故ニ最初ヨリ複生

ムルホプル

スルモノハ傳染スルヲ稀ナリトス總テ惡性成

ハ傳染性贅腫ノ名ヲ命スルニハ右ニ論スルカ

如ク贅腫ニ一定ノ解剖的構成ヲ具フルヲ基ト

ス之ヲ生スル局部ニ於テ之ヲ命名スヘカラス

然ラサルハ二種ノ贅腫ヲ區別ス可カラサルニ

至ル例之此ニ孤立性ノ良性ノ贅腫アリテ腦ニ

生スルトキハ其人之カ為ニ斃レハシ又傳染性
贅腫ヲ腦ニ生スルトキハ他部ニ傳染スルヲナ
カルヘシ如何トナレハ傳播スルニ先クナテ既
ニ死ニ至ルモノナレハナリ
惡性贅腫中手術後同所ニ再發スルモノアリ或
ハ同所ニ再發セスモテ他部ニ轉移スルモノア
リ但シ轉移ニ二種ノ別アリ即チ一ハ手術後贅
腫ノ餘剩ヨリ曾テ生セシ部ニ復ヒ發生スルモ
ノアリ連續性再發ト云一ハ贅腫ヲ餘剩ナク剔
出セシ後歲月ヲ經テ其瘢痕中或ハ其近接部ニ

於テ同源因ニ由テ新タニ贅腫ヲ生スルモノアリ
局部性再發ト云又手術ヲ施コセシ部ニ復ヒ贅腫ヲ
發生スルヲナク曾テ剔出セシ贅腫ト同種ノモノ
ヲ水脈腺ニ生スルヲアリ或ハ水脈腺ニ生ス
ルヲナクシテ之ヲ遠隔スル他ノ器械ニ生スル
ヲアリ如此ハ總テ水脈腺及他器械ニ手術前既
ニ同質ヲ傳播セシ者ニシテ之ヲ探知シ得サル
ニアリシナリ

惡性贅腫ノ傳染ヲ受クル患者ハ其體質ヲ血液
調和不良ト云フ即チ炎症ニ罹ル局部ヨリ惡膿

ヲ吸収スルヲ血液調和不良即チ膿毒症ト云フニ同

シ此ノ如キ患者ニアリテハ疾病ノ源トナルヘ

キ異物アリテ血液ニ混シテ環流スルナリ該血

液調和不良ハ傳染性贅腫ニ於テハ全身給養不

良即チ羸瘦或ハ衰弱ヲ生ス此症ノ輕重ハ贅腫

ヲ生スル局部及其性質患者ノ強弱年齡等ニ由

テ一様ナラス

贅腫ノ療法贅腫ハ之ヲ除去スルノ外術ナシ即

チ截除結紮、エクラセウル施用、腐蝕藥等其他諸

般ノ術ニ由テ之ヲ治療ス又惡性贅腫或ハ手術

ヲ施ス可カラサル者ニ於テハ只患者ノ困苦ヲ
寛解シ且ツ餘生ヲ永クスルニアリ即チ姑息療
法ナリ手術療法ハ之ヲ贅腫ノ各論中ニ於テ之
ヲ詳論スヘシ

外科通論卷之十九終

東京第四大區四小區
湯島五丁目十三番地

出版人

佐藤尚中

右同所

述人

佐藤進

發兌書林

馬喰町二丁目五番地

島村利助

